

2013 年度

「卓越した大学院拠点形成支援」プロジェクト

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻

国内学会・研究会発表助成 報告書

牧畜民の定住化にともなう放牧管理の新展開

稲角 暢

本発表においては、平成23年度および24年度における調査の結果について示し、現在執筆中の論文の展望と、今後の調査の見通しについて発表し、参加者に意見を募った。

本研究は、ケニアの牧畜民ポコットにおける放牧管理の形態変化を明らかにすることを中心的な課題とし、定住化を軸とした大きな社会変化に対して、牧畜民がどのような対応を迫られているのかを包括的に解明することを目的としている。東アフリカの乾燥地域において、牧畜民は複雑な自然環境の変化に適応した、柔軟な遊牧戦略をおこなってきたが (Dyson-Hudson, 1966 など)、近年では開発援助計画などをうけて、移動性の高い遊牧から、定住的な農牧への移行が進んでいる。こうした変化は社会問題の契機ともなりうるが、調査対象の東ポコットでは、(1) どのような放牧管理形態の変容が迫られ、(2) 人々の社会関係に影響を与えているのだろうか。本発表では (1) についての調査結果を示す。

調査地であるケニア共和国リフトバレー州の東ポコットにおいて、私は牧畜民の放牧に関して二つの調査を進めた。一つは、ウシ群とヤギ・ヒツジ群の日帰り放牧について、日帰り放牧の詳細な管理技法やタイムスケジュールを調べ、家畜所有者のホームステッドの人口比率との関連を調べた。もう一つは、ロバ群の遊動について、所有者の居住地からはなれ、所有者からの日常的な介入をほとんど受けないロバ群の遊動形態と、所有者のロバ群監視体制の詳細を明らかにした。

結果として、ウシ群とヤギ・ヒツジ群の日帰り放牧の調査では、人による放牧への介入が減少し、採食・休息・移動などの行動を家畜が自律的に選択していること、定住生活による学校教育や賃労働との兼ね合いから、ホームステッド内の放牧従事者数が足りなくなると、他地域の縁者から放牧従事者を補填していることなどが明らかになった。

ロバ群の自律的遊動の調査からは、ロバ群は生態的な親子・親族関係による結びつきに基づいた群れ構造を持つこと、それゆえ分離拡散しないロバ群を、地域住民全体による相補的な家畜監視体制の中で所在を把握し続けることで、ロバの所有者は効率的にロバ群を管理できていることなどが解明された。

論文執筆に向け、放牧の GPS データの解析などの見通しを示したほか、今後の調査としては、ロバ群全体のさらなる包括的な動態の把握や、牧夫の具体的な放牧知識の収集などに力を注ぐ計画を検討した。